性を確保することによりトラブル発生件数を減らす，医療機器の新規購入・更新の際に医療機器に関する情報を助言する等を行うことによりコスト削減に貢献できると思われる．

VI. 結　　語

医療機器の先には「ヒト」がいることを強く認識し，臨床工学技士の役割を常に念頭に置き業務に携わり，真に役に立つ，頼りになる臨床工学技士となるよう努力していくことが，患者さん，および病院に対する臨床工学技士としての一番の貢献であると考えている．

当院における移植医療の検討

臨床工学課　田 形 勝 至

I. はじめに

当院における死体臓器移植は，2002年に脳死に近い状態の家族から旧ドナーカード所持情報を受け，心肺停止後の献腎角膜移植に至った2症例のみである．

今回，移植医療について職員を対象にアンケート調査し，今後の当院における移植医療推進のための検討，施策の参考としたので，院内移植コーディネータの立場から報告する．

II. 目　　的

移植医療について，正職員全員を対象にアンケート調査を実施し，院内脳死判定および臓器摘出に関する委員会で今後の移植医療の検討，施策の参考とする．

III. 方法・期間

移植ネットワークのドナーアクションプログラムを基にアンケートを作成し，2004年11月19日に各職場に配布，11月29日に回収，集計した．

IV. 結果・考察

配布712枚，回収率86.4%，意思表示カード所持率が21.6%で，国民世論調査所持率に比べて，移植医療に対しての関心が高いと思われた．

移植のための臓器提供については，賛成が66%であった．自分が死んだら臓器提供したいですかの問いには「はい」が38%，家族の場合だと13%と，実際にドナー側の患者やその家族の立場に立つ質問では，臓器提供に対する賛成の答えが反転するなど，移植医療が発展しない背景が伺えた．また意思表示カードの表記が分かりにくいと指摘した職員が多数いた．

入院時に意志表示カード所持の有無の調査実施についての問いには，実施すべきが，58%と過半数以上だったが，反対意見の中には，治療前に臓器提供の調査をするのは，患者に対し不安感を与えるのではないか，臓器提供目的で調査する事自体がおかしいなどの意見があり，移植コーディネータの立場からすれば，情報不足による移植医療に対しての誤解があると思われた職員がいた．

V. 結　　語

当院では職員に対して，勉強会や意志表示カードの説明会による情報提供が移植医療推進にむけて重要と考えられる．